

劇団ひたバス

愛称発表セレモニー公演

「幸せの青いバス

〜父と、ボクと、

時々ひたバス〜」

（仮）

劇団ひたバス愛称発表セレモニー公演

「幸せの青いバス」父と、ボクと、時々ひたバス」(仮)

シーン1 ちやぶ台を囲む4人家族。とある日の食卓。

ナレ

これは常陸大宮に住む、ある家族の物語。厳しいお父さんと優しいお母さん。無邪気な妹にちよつと反抗期のお兄ちゃん。おや。そんな反抗期のお兄ちゃんのせいで、穏やかな食卓がちよつと陰悪な雰囲気になっているようです。

父 (新聞を読みながら) おい〇〇。お前高校卒業したらどうするんだ。ちゃんと考えてるのか。

息子 うっせーな。考えてるよ。

父 どうするつもりなんだ。

息子 親父みたいな、ど田舎の誰も乗らねえバスの運転手だけにはなんねーよ。

父 なんだとー！

母 〇〇なんてこと言うの！お父さんに謝りなさい。

息子 なんで謝んなきゃなんねーんだよ。事実だろ。今どきバスなんて。磯崎のじーちゃんだってあんなだけの長距離、車で乗り回してんだぞ。年寄りが乗んなかったら誰が乗んだよ。

妹 (けんかが始まり泣き出す)

父 そうか。お前はそんなふうには思ってたのか。もう勝手にしろ。

息子 言われなくてもそうするよ。俺、出てくから。

母 待って〇〇！お父さんもほら。冷静に！止めてくださいよ。

父 あんなやつもう知らん！

息子 (出ていく息子)

息子 (かったるそうに歩く)

女性 (赤ちゃんを抱っこしながら歩いてくる)

あらー○○くんー!

息子 あ、こんちは。○○くん大きくなりましたね。

女性 そうなの。最近は抱っこするのも重くなってきたね。

よいしょと。(赤ちゃんをおろす)

息子 どっかお出かけっすか。

女性 そう。まあちよつとお散歩ね。久々に抱っこしながら歩いたら疲れちゃった。お出かけするときはいつも○○くんのお父さんのバスだからさ。

息子 ああ。(ちよつと気まずそうに)

女性 この子、はじめのうちには、よくバスでぐずつちやって。その度にお父さん、大丈夫ですよ、気にしないでくださいね、って声かけてくれて。わたしその言葉にどれだけ救われたかわからないわ。

息子 親父、そんなこと言っすか。

女性 そうよ。小さい子どもによく飴とか配ったりして。うちの子もすっかり懐いちゃった。

息子 へえ。

女性 とにかくお父さんのバスに助けられてるわ。お父さんによろしく伝えてね。

息子 あ、はい。

女性 (去っていく)

シーン3

息子、部活帰りの後輩に出会う。

高校生 A

(走ってくる)

〇〇先輩じゃないっすか！こんちは——っす！

息子

おお。久しぶり。どうだ部活。

高校生 B

今日の練習試合勝ったんすよ。これで〇〇先輩のお父さんにいい報告ができます。

息子

なんでうちの親父なんだよ。

高校生 C

部活帰り先輩のお父さんのバス乗るじゃないっすか。そうすつとなんでもバレちゃうんすよ。〇〇お前、今日はあんま調子よくなかったのかって。

高校生 A

そうそう。またそのあとのアドバイスが絶妙なんだよな。

高校生 B

まあ、俺たちがこうやって遅くまで部活やれんのも、お父さんのバスのおかげっすから。

高校生

(そうそう、と三人でうなづく)

高校生 C

じゃあ先輩。お父さんに伝えといてくださいね。今日の〇〇(高校生C)は違ったぞって。(どや)

息子

おお。じゃあな。

高校生

(去っていく)

爺 おお。○○。

息子 おお。○○のじっちゃん。

爺 なんだそんなつまんねー顔して。彼女にフラれたか。

息子 ちげーよ。親父とけんかしたんだよ。

爺 ほお。またなんで。

息子 親父みてえな田舎のバス運転手にはならないって言ったんだよ。

爺 はっはっはっはっはっはっはっ。

息子 何がそんなにおかしいんだよ。

爺 いやあ。親子とは似るもんだなあ。お前の親父も若い頃おんなじこと言ってたよ。

息子 親父が？

爺 そうだよ。でもあいつの父ちゃん、つまりお前のじーちゃんだな。じーちゃんも元気にあちこち行ってたんだがある時、足を悪くしてな。そのじーちゃんが死ぬとき「もつといるんなとこ行きたかった」って言ったらしい。それで親父の思いを叶えられなかった分、俺が地元の人間の足になるうって思っって今の仕事についたみてえだぞ。

息子 そっか。知らなかった。

爺 まあお前も悩んだらいいさ。じゃーな。

息子 おお。またな、じっちゃん。

(去っていくじっちゃんを見つめる)

息子 (家の方向に走り出す)

ナレ 地元の人々と話をした○○は何か気付いたようです。

母 ○○！

息子 親父。ちょっといいか。

父 なんだ。

息子 俺、地域の人に会ったんだ。親父の話みんなしてた。家にいるときと違って、外では愛想いいんだな。

父 なんだよ。まだけんか売る気か。

息子 違う。俺、知らなかった。仕事のことも、親父のことも、何にも。親父がこんなに地元を支えてると思わなかった。親父、俺、決めたよ、将来のこと。

父 なんだ。バスの運転手になるのか。

息子 いや。俺、公務員になってこの常陸大宮市を支えたい。親父がこの地域の人を守ってきたように、俺も地元に貢献したい。

父 ○○：

息子 俺、○○のじっちゃんからじーちゃんの話聞いたんだ。親父がバスの運転手になるって決めたときの話。聞かせてよ、その話。

父 なんだよ。相変わらずじっちゃんはおしゃべりだな。

父・息子 (ちゃぶ台に座り、話を始める二人)

〈BGM:若い広場(ひよっこオープニング)〉

ナレ どうやら○○くんはお父さんと和解できたようですね。お父さんの偉大さだけでなく、自分の生まれた街を支えることの大切さに気付いた○○くん。常陸大宮市の未来をつなぐのは○○くんだけではありません。ここにいる小瀬高校のみなさんも、この常陸大宮市の未来を創る一人なのです。私たちが考えた「ひたバス」という愛称でこのバスは走り出します。地元を支えるひたバスのように、私たちも地域のために走り続けたいものです。そんなひたバスは今日も走ります。私たちの夢と希望を乗せて…。

〈完〉